

障害児のきょうだいに対する家族の意識

—きょうだい, 母親, 父親の三者間の比較から—

水内 豊和・芝木 智美・片岡 美彩・関 理恵・
高緑 千苗・鶴見 真理子・水内 明子

障害児のきょうだいに対する家族の意識

—きょうだい，母親，父親の三者間の比較から—

水内 豊和・芝木 智美*・片岡 美彩**・関 理恵**・
高緑 千苗**・鶴見 真理子**・水内 明子***

The Perception of Parent about Their Children without Disabilities who Have Sibling with Disabilities:
Compare with Siblings, Mothers and Fathers

Toyokazu MIZUUCHI, Tomomi SHIBAKI, Misa KATAOKA, Rie SEKI, Chinae TAKAMIDORI,
Mariko TSURUMI & Akiko MIZUUCHI

要旨

近年わが国では、障害児・者の保護者にとどまらず家族全体への支援が必要と考えられるようになり、障害のある同胞の「きょうだい」も支援の対象と考えられている。しかし、きょうだい達になぜ精神的負担が生じるのか、同胞に対して抱く感情などのメカニズムについては実証的に明らかにされていない。そこで、本研究は、同胞に対するきょうだいの感情を、きょうだい自身、母親、父親の三者に問うことで、家族間の認識の共通点と相違点について明らかにすることを目的とし、三者に質問紙調査をおこなった。きょうだい・母親・父親へのアンケート調査の結果から、三者間の“きょうだいの悩み”、“きょうだいへの責任”、“きょうだいへの支援”という、きょうだいに関する認識について、三者の共通点と相違点が明らかとなった。

キーワード：障害児，きょうだい，父親，母親

Keywords : children with disabilities, sibling, father and mother

I. 問題と目的

まずはじめに、本論では、障害のある当事者のことを「同胞」とし、またその兄弟姉妹のことを「きょうだい」と区別する。

この、きょうだいは、親と同じくらい同胞と時間を共にし、さらに親亡き後を考えると、親以上に同胞と時間を共有することとなる可能性が高い。さらに西村ら(1996)⁴⁾によると、同胞にばかり親の目が行き、他のきょうだい達への世話の時間や目をかける深さを削ることや、同胞の世話や家事を手伝うことが要請され、家族内での役割が一般的な兄弟姉妹とは異なること、家族のために自分の時間を割かなければならないことなどが生じるため、子どもの認知や社会性、それに情緒の能力の発達を促進する家族外での経験を少なくしてしまうことが指摘されている。こうした状況に対して、きょうだいへの支援は、同じ立場にあるきょうだいたち同士が交流する場を設け、彼らの不安や悩みを緩和することを目的とした心理社会的な支援が主に実施されてきた。わが国では、特に「全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会」や「ア

スぺエルデの会」といった親の会のような団体が、きょうだいへの支援を行う中心的な組織として活動をしているほか、各地でも大学が支援プログラムの意義と効果について検討することを目的におこなうような取り組みが散見されるようになってきている。

障害のある同胞のきょうだいに関心が向けられるようになったのは、比較的最近になってのことである。1970年ごろより、障害児をもつことがその家庭にどのような影響を与えているかについて、とりわけ障害児の保護者が受けるストレスとそのソーシャルサポートを研究の中心的関心事として多く検討されてきた。それが今日では、石川(1998)³⁾が述べるように、その支援の対象を保護者、特に母親ばかりに限定するのではなく、きょうだいを含めた家族全体を対象とした研究にシフトしてきている。たとえば、西村ら(1996)⁴⁾は、きょうだいが家族の中で重要な役割を担うことは、能力や自尊心に対するきょうだい達の感覚を拡大するとともに、人格の成熟を早め責任感を生むプラスの効果を持つと述べている。加えて、同胞の世話をすることはきょうだい達にとって、親の役割を学ぶ社会化の良い機会となると指摘している。さらに、同胞ときょうだいの関係を遊び場面で見られる相互作用の特徴から分析した石川(1998)³⁾の研究では、きょう

* 富山大学大学院医学薬学研究部・特命助教

** 富山大学人間発達科学部・学部学生

*** 富山市スクールサポーター

うだいは同胞に対する態度・役割・同胞に対する感情のいずれも、対照群（定型発達児の兄弟姉妹）と比較して肯定的に捉えているきょうだいが多いという結果を示している。このように、きょうだいが同胞に対し否定的な感情を抱くだけでなく、肯定的に捉える側面もあるということも分かってきている。

しかし、柳澤（2007）⁹⁾も指摘するように、きょうだいに對する心理・社会的な側面への支援の必要性、とりわけ心理面への支援アプローチに基づいた心理教育プログラムの提供が重視されているものの、きょうだい達になぜ精神的負担が生じるのか、何が否定的に影響するのかといったメカニズムについては実証的に明らかにされていない。さらに同胞に対して抱く感情は、同胞との生活から直接的に影響されるものだけでなく、保護者からの直接的・間接的影響も少なくないことは想像に難くない。しかし、これまで同胞に対する感情について保護者ときょうだいとの関係を考慮した研究はあるものの、そこでいう保護者はほとんどにおいて母親であり、父親がどのような感情を持っているのかという視点での検討はみられない。

そこで本研究は、同胞に対するきょうだいの感情を、きょうだい自身、母親、父親の三者に問うことで、家族間の認識の共通点と相違点について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象と手続き

2012年2月5日に富山県内で筆者らが協力して開催した、障害者とそのきょうだいを題材とした映画の上映イベントの際に、会場にて質問紙を配布し、終了後出口にて回収した。イベントの開始時に、アンケートは本研究の目的に沿っておこなわれること、無記名式でありデータは統計的に処理されること、回答は任意であることを伝えた。このイベントの参加者は約500名であり、331名から回答を得た。そのうち、親以外の家族・親戚、障害のある当事者、支援者、その他を除いた、きょうだい、障害のある子を持つ母親、父親の3者の回答（計147部）を本研究における分析の対象とした。対象者の属性を表1に示す。

なお、今回の検討に際しては、回答者の家族の障害として知的障害、発達障害、聴覚障害、肢体不自由がみられた。知的障害、発達障害の人数は割合としては多かったものの、分析する上で十分とは言えないため、障害の種類ごとに分けて検討はしていない。また、同胞の性別ならびに年齢も同様の理由から考慮せず一括して検討することとした。

2. 内容

質問紙は、①属性として、回答者の立場・性別・年齢、障害のある同胞の性別・年齢・障害の種類（きょうだい以外は回答不要）、②きょうだいの悩みについての考え

	きょうだい	母親	父親
人数	23	97	27
性別	男 4 (17%)		
	女 18 (78%)		
年齢	10代 8	0	0
	20代 9	0	1
	30代 3	18	4
	40代 2	55	9
	50代 1	18	7
	60代以上 0	6	6

（15項目、5件法）、③きょうだいへの思いに関する2つの自由記述式の質問（「きょうだいは、障害のある兄弟姉妹に対して責任があると思いますか？お考えがあればお書きください」、「きょうだいへの支援は必要だと思いますか？またその場合、どのような支援が必要だと思いますか？」）から構成された。

III. 結果と考察

1. きょうだいの悩みについての考え

15項目からなるきょうだいの悩みについての質問項目に対し、きょうだい、母親、父親の三者間で考え方が異なるかを検討した。各項目について、「そう思わない（1点）」「どちらかといえばそう思わない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思う（4点）」「そう思う（5点）」として結果を処理した。

平均得点について分散分析による差の検定をおこなった（表2）。

(1) 家族や親に関する項目

家族や親についてたずねる項目1～4について検討した結果、「4. きょうだいの悩みには親の養育態度が関係している」において家族の立場による主効果が認められた。Fisherの最小有意差法（以下同じ）による多重比較の結果、父親よりも母親のほうが強くそう思っていることが示された。

(2) きょうだい自身に関する項目

きょうだい自身についてたずねる項目5～9について検討した結果、「6. きょうだいの悩みにはきょうだいが男性か女性かということが関係している」ならびに「7. きょうだいの悩みには兄弟・妹弟という出生順が関係している」といったきょうだいと同胞の性別や出生順といった構成を問う項目において、家族の立場による主効果が認められた。多重比較の結果、性別についてはきょうだいよりも母親が、出生順については父親よりも母親がより強くそう思っていることが示された。

(3) 同胞の障害に関する項目

同胞の障害に関する項目10～13について検討した結果、「11. きょうだいの悩みには障がいの種類が関係している」、「12. きょうだいの悩みには障がいの程度が関係している」、「13. きょうだいの悩みには障がい

表 2

質問項目	きょうだい	母親	父親	F 値	P 値	検定
	(上段)平均得点 (下段)標準偏差					
1 きょうだいの悩みには 家族関係 が関係している。	4.000	3.959	3.852	0.1309	0.8774	n.s
	1.128	1.070	1.231			
2 きょうだいの悩みには 家族の経済状況 が関係している。	3.348	3.320	3.259	0.0334	0.9672	n.s
	1.434	1.238	1.318			
3 きょうだいの悩みには 親の性格 が関係している。	3.739	3.701	3.556	0.1975	0.8210	n.s
	1.389	1.110	1.188			
4 きょうだいの悩みには 親の養育態度 が関係している。	3.609	4.010	3.481	3.3081	0.0394	*
	1.469	0.930	1.122			
5 きょうだいの悩みには きょうだいの年齢 が関係している。	2.826	3.330	3.148	1.4043	0.2489	n.s
	1.370	1.281	1.406			
6 きょうだいの悩みには きょうだいが男性か女性かということが関係している。	2.261	3.021	2.815	3.2371	0.0422	*
	1.287	1.299	1.272			
7 きょうだいの悩みには 兄姉・妹弟という出生順 が関係している。	3.000	3.371	2.815	2.5280	0.0834	+
	1.314	1.219	1.241			
8 きょうだいの悩みには きょうだい自身の性格 が関係している。	3.696	3.794	3.556	0.5272	0.5914	n.s
	1.295	0.999	1.188			
9 きょうだいの悩みには きょうだい自身の交友関係 が関係している。	3.174	3.392	3.185	0.5372	0.5855	n.s
	1.466	1.123	1.075			
10 きょうだいの悩みには 障がいのある兄弟姉妹の問題行動への対処などの対応の難しさが関係している。(例)障がいのある兄弟姉妹がパニックを起こした時にきょうだい がどう対応すればよいかわからない、など。	3.522	3.876	3.593	1.3544	0.2614	n.s
	1.563	1.003	1.047			
11 きょうだいの悩みには 障がいの種類 が関係している。	3.087	3.825	4.000	4.5330	0.0123	*
	1.311	1.164	1.038			
12 きょうだいの悩みには 障がいの程度 が関係している。	3.261	4.010	4.074	4.0344	0.0197	*
	1.484	1.150	1.035			
13 きょうだいの悩みには 障がいのある兄弟姉妹の自立具合 が関係している。(例)障 がいのある兄弟姉妹がでかける際に付き添わなければならない、など。	3.522	4.082	3.815	2.5766	0.0795	+
	1.504	1.007	1.111			
14 きょうだいの悩みには 社会との関わりの不足 が関係している。(例)障がいのある兄 姉姉妹の参加できる育児サークルが少ない、など。	3.696	3.907	3.630	0.8701	0.4211	n.s
	1.428	0.990	1.115			
15 きょうだいの悩みには 社会一般の障がいの理解 が関係している。	3.957	4.588	3.963	7.9693	0.0005	**
	1.331	0.747	0.980			

**：1%有意 *：5%有意 +：有意傾向

のある兄弟姉妹の自立具合 が関係している」といった障害のある同胞の状態に起因する悩みを問う項目において、家族の立場による主効果が認められた。多重比較の結果、どれも父親・母親と比較してきょうだいの得点は低く、障害のある同胞の状態はきょうだいにとって、両親が思うよりも悩みの影響因となっていないことが示された。

(4) 社会資源と社会一般の理解度に関する項目

社会資源と社会一般の障害理解に関する項目14～15について検討した結果、「15. きょうだいの悩みには 社会一般の障がいの理解 が関係している」においても家族の立場による主効果が認められた。多重比較の結果、きょうだいならびに父親よりも母親のほうが、社会一般の障害(者)への理解が関係していることが示された。

2. 三者から見たきょうだいへの思い

三者から見たきょうだいへの思いについて、より詳しく意識を検討するため、①「きょうだいは、障害のある兄弟姉妹に対して責任があると思いますか？お考えがあればお書きください」、②「きょうだいへの支援は必要だと思いますか？またその場合、どのような支援が必要だと思いますか？」という2つの自由記述式の質問から得られた回答は、それぞれ筆者らによりKJ法による分析をおこなった。

(1) きょうだいの同胞への責任について

a. きょうだいが考える責任

記述総数のうち36%が親亡き後の責任を感じており、「親が亡くなった後はきょうだいが支えてあげないといけないと思います。(10代)」「親が亡くなったりしたときは自分も何かなくてはと思うこともあります。…」など親の代わりとして責任があるという考えがあった。次いで19%が家族としての責任を感じており、「きょう

だいに責任はないと思うけど、協力して生きることは大切だと思う。(10代)「責任はないけれど、実際には避けられないものであり、自分のきょうだいも暮らしていけないとなれば助けたいと思うことは当然。自分の幸せは家族の幸せとは切り離せないものだから。(40代)」など、同胞の障害の有無に限らず、家族は助け合うものという意見も多くあった。さらに、「責任は感じています。お父さんとお母さんだけじゃ無理がある。でも自分の人生も大切で、複雑です。(20代)」「責任…というか運命なので、(省略)。(20代)」など責任を実感しており、20代という年齢にもかかわらず、既にきょうだい自身が親亡き後の不安や心配をしていることが分かる。

b. 母親が考える責任

母親が考える責任については、きょうだいと同様、自分が亡くなった後(親亡き後)責任があるという回答が15%と最も多く、具体的には「親が死んだ後の生活(経済的な面、日常生活)の世話など。(30代)」「両親が亡くなった後は、最小限の援助はしてほしい。(30代)」などがあつた。他には、きょうだいと同様、同胞の障害の有無に限らず、家族として責任があるのではないかという意見が12%であつた。「家族なので、責任はあると思います。(40代)」「家族である以上、助け合うのが必要。(40代)」また、9%が家族としての責任とまではいえないが、きょうだいとして「支え合ってほしい」「見守ってほしい」など親としての願いのような考え方もあつた。また、親が責任ある・ないと判断するのではなく、「きょうだい本人が判断するもの」「自分の人生を優先してほしい(50代)」などきょうだいが決めるものと考えている意見もあつた。

c. 父親が考える責任

父親が考える責任については、父親は母親に比べると母数も少なく回答の割合は少数であつたが、母親と同様に親亡き後の責任を19%が挙げており、「親亡き後は、きょうだいが見る、見ればいい。(50代)」などの回答があつた。また同じ19%で「頼れるのはまず、血縁者である。これは逃れようのない事実。(50代)」などの意見があつた。また、「少しでも金は、残してやりたいです。(60代)」など親としての責任を感じている意見も19%であつた。

(2) きょうだいへの支援の必要性について

a. きょうだい考える支援

「同じ境遇の方がクローズアップされることは少ないので、集まれる場所があればと思います。(20代)」「サークルのようなもの?自分が子どものとき、そのようなものがあつたら参加したかった。むしろ、今からでも。(30代)」などきょうだい会のようなきょうだい同士が集まれる場を幼少期から現在に至っても必要としている人が20%いた。きょうだい会に限らず「話し相手(20代)」「コミュニケーションをかわすこと」など他者と交流することを求める意見も20%と多かつた。次いで、きょうだい会と似たような意味を持った「相談できる第三者(20代)」

が16%であつた。なお「相談できる第三者」とは、家族以外の存在や自分の思いを言える大人などが挙げられ、具体的には家族や教師、専門家・専門機関などに相談するという意見は皆無であつた。

b. 母親が考える支援

母親が考える支援では、きょうだいと同様に「きょうだい会」が24%と最も多かつた。さらに、「やはり親以外に話を聞いてくれて、支えてくれるところがあれば。(40代)」など「相談できる場所・人」が11%と続いた。また、「幼少期からの支援の必要性(40代)」を述べた回答や“きょうだいへの社会資源や障害の説明といった情報の提供”や“きょうだい同士の情報の共有などができるようなサポート”などの「情報面での支援(50代)」がそれぞれ10%挙げられていた。

c. 父親が考える支援

父親が考える支援では、漠然と「話し相手、相談相手としての支援(60代)」「障害のある兄弟姉妹への関わり方や悩み相談(40代)」などの「相談できる人」という項目が24%と多かつた。父親ではきょうだいや母親において多く挙げられた、きょうだい会といった具体的な意見はみられなかつた。次いで、17%が「就業、生活支援(60代)」といったきょうだいへの支援というより同胞への支援としての「生活面のサポート」が挙げられていた。父親は、きょうだいへの支援という視点より、同胞への支援の必要性を訴える意見が多くみられた。また、11%が「家族だけでなく、社会全体で支える仕組み作りが必要。(40代)」など社会資源の整備や社会の意識などの社会の仕組みそのものに対する意見もみられた。

IV. 総合考察

今回、きょうだい・母親・父親へのアンケート調査の結果から、三者間の“きょうだいの悩み”、“きょうだいへの責任”、“きょうだいへの支援”という、きょうだいに関する認識について、三者の共通点と相違点とが明らかとなつた。

1. きょうだいの悩みに関する認識

きょうだいの悩みに関しては、親の養育態度といった“家族関係”や“社会一般の障害の理解”が三者間で共通してきょうだいの悩みとの関係をしているという認識であつた。高野ら(2011)⁶⁾も指摘するように、きょうだいの問題を考える上で、きょうだいをめぐる家族の関係性が、重要な視点になってくるということもきょうだい・母親・父親いずれも認識しているということが分かる。また、山本ら(2000)⁸⁾は、障害者に対する偏見や差別も多かれ少なかれきょうだいに影響を与え続け、それは家族全体の問題にも繋がることがあると指摘しており、実際に今回のアンケートからも社会の障害に対する認識の程度がきょうだいの悩みと関係していると三者が共通して感じていた。他にも、“親の性格”、“親の養育態度”、“きょうだい自身の性格”、“同胞の問題行動への

対処”，“同胞の自立具合”，“社会との関わり”など共通してきょうだいの悩みとの関係を認識していた。この三者間の共通点がきょうだい支援を考えていく上で、重要なものとなるだろう。三者間で同様にきょうだいの悩みと関係していると認識しているということは、家族全体がきょうだいのことだけを考えた支援ではなく、家族全体への支援として望んでいるものであると考えられる。それは、検討2のきょうだいの「自分の幸せは家族の幸せとは切り離せない。」という回答からもうかがえるように、きょうだい genuinely 必要としている支援を考える上でも、重要な視点と考えられる。一方、三者間の相違点では、“きょうだいの性別”，“障害の種類”，“障害の程度”に関しては、きょうだいと母親・父親において認識の違いが明らかとなった。今回のアンケートに限ってみれば、きょうだい自身は“きょうだいの性別”，“障害の種類”，“障害の程度”を母親・父親ほど深刻にきょうだいの悩みとの関係を意識していないということがうかがえる。しかし，“母親ときょうだい”に生じる認識の違いについては、これまでもいくつか報告されている（高野ら，2011）⁶⁾が、さらに今回のアンケートでは“父親ときょうだい”，“父親と母親”のそれぞれの間での認識の違いが明らかとなった。父親はきょうだいへの支援のあり方をたずねた質問においても、きょうだいへの直接的な支援である、きょうだい会、情報の提供など具体的な記述はみられず、むしろ同胞への支援に関する記述が多くみられた。このことは、父親は、同胞を支援することできょうだいへの負担を減らそうと考える傾向がうかがえると言える。

2. きょうだいの責任と支援に関する認識

検討2においては、きょうだい・きょうだいへの思いを分析する中で、単に同胞への責任があるかないかという視点だけではなく、きょうだい genuinely 責任を感じているのかなど“現実的状况を述べたものか、願いや思いを述べたものか”という視点での分析も加えた。同様に支援に関しても、支援の必要性があるかないかという視点だけではなく、きょうだいへの直接的支援か間接的支援かということも同時に考慮し、“必要があるか、ないか”“直接的支援か、間接的支援か”という2つの視点で検討した。この多元的な視点に立って三者の共通点と相違点について考察する。なお、ここでいう直接的支援とはきょうだいに直接おこなう支援のことを指す。

(1) きょうだいの責任について

きょうだい・母親・父親の三者の共通する項目としては、“親亡き後”がそれぞれ割合的にも最も多く、やはり両親亡き後も支えとなる存在は、やはり家族であると考えられる。しかし、“現実的状况を述べたものか、願いや思いを述べたものか”という視点でみると、きょうだいは比較的現実的状况を述べた回答の割合が多く、約半数となっている。さらに「現実的に責任を感じている」という記述はきょうだいに多く、同様に母親でも

「きょうだい自身は感じているのではないか」という意見もみられた。一方、きょうだい自身の思いに言及するような回答は父親にはみられなかった。今回の調査で、父親の回答数は絶対的にも、相対的にも少数であったが、先行研究ではみられなかった父親の回答が得られ、きょうだいの思いに言及するような回答が父親のみなかったことも特徴的であった。田倉（2008）⁷⁾によれば、きょうだいは、母親の障害児受容と類似する過程が存在するとも考えられ、きょうだいは現在の状況を肯定的に捉える一方で、普通の兄弟姉妹関係を望む気持ちは存在し続けることが示唆されている。比較的、客観的に家族に関して捉えることができるきょうだいだからこそ、現実的に考える傾向がみられたのではないだろうか。

(2) きょうだいへの支援について

きょうだい・母親・父親の共通する項目としては、「相談できる人・場所」といった意見が多かった。

さらに、相談できる人として母親・父親という記述はなく、具体的に「第三者・話せる大人」が挙げられていた。主に小学生のきょうだいを対象としたきょうだいを受けるサポートについてアンケート調査によって明らかにした阿部ら（2011）¹⁾の研究においても、きょうだいの悩みは一番目に「母親」、2番目に「その他（友人・先生）」、3番めに「父親」という結果となっていることから分かるように、きょうだいは悩みを家族に話すだけでなく、家族とはまた別の相手も必要としていることが今回のアンケートからも示唆されたと言える。今回のアンケートの回答者としてのきょうだいは主に20代以上が多く、きょうだいのライフステージを考慮すると「その他（友人・先生）」といった相談相手の割合が母親よりもより多くなっていることは容易に推察できる。さらに、“直接的支援か間接的支援か”という視点でみると、きょうだい genuinely 上げる間接的支援は“経済的支援”のみであり、“情報面での支援”や“(同胞への)生活面のサポート”とする母親・父親とは異なる結果が出た。“きょうだい会”や“話し相手”などは母親や父親にもみられる回答であったが、きょうだいは親以上にきょうだい自身にとって身近で直接的な支援を必要としていることが分かる。きょうだいの心理的特徴に関係していると思われる項目に関する三者間の認識の違いが、支援内容の違いへとつながったのではないかと考えられる。

V. おわりに

今回のアンケート調査からは、検討2の支援を必要としているかどうかについて、きょうだい自身は支援を必要としていないという意見が4%みられた。成人のきょうだいを対象とした先行研究においても、きょうだい自身が支援の必要性を語らなかった（圓尾ら，2010）²⁾という記述もみられる。このように、支援を必要としていないきょうだいもいるということが分かる。この結果は、きょうだいのライフステージと関係していると考えられ

る。今回のアンケート調査における回答者のきょうだいは20代以上が多く、学齢期に比べると悩みの質が異なることが支援を必要としないという回答が得られたことに繋がると考えられる。しかし、大瀧（2011）⁵⁾も述べるように家族の中で混乱が生じた場合、家族関係の混乱はそれ自体がきょうだいへの支援を必要とすることを示すのではなく、きょうだいが家族関係の混乱を重荷と感じた場合に、周囲から手が差し伸べられる枠組みが整っているとよいと考えられ、今回の結果からは支援を必要としないとまでは言い難く、支援は必要か／必要ないかという極端な議論に結びつけることはできないと言える。また、きょうだいの悩みやそのほかの思いなどといった心理的特徴には様々な要因が関係しており、同じ要因について調べた研究でもさらに様々な別の要因の影響を受け、結果が一致しないこともあると指摘されている（高野ら、2011）⁶⁾。さらに、今回のアンケート調査においても、きょうだいへの支援のあり様については様々な意見がみられた。そこで、きょうだいへの支援においては個別性の高い支援が望ましいと考えられる。さらに、年齢や発達段階を考慮した支援も必要となってくるだろう。なお、本研究では、障害のある同胞の性別や年齢、そして障害の種類を変数として考慮していないが、今後はこの点についてより詳細な検討を行なう必要がある。

引用文献

- 1) 阿部美穂子・神名昌子(2011)障害のある子どものきょうだいを育てる保護者の悩み事・困り事に関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要, 6(1), 63-72.
- 2) 圓尾奈津美・玉村公二彦・郷間英世・武藤葉子 (2010) 軽度発達障害児・者のきょうだいとして生きる：気づきから青年期の語りを通して. 教育実践総合センター研究紀要, (19), 87-94.
- 3) 石川清美 (1998) 障害児のきょうだい関係と養育態度との関連性：遊び場面に見られる相互作用の分析から. 広島県立保健福祉短期大学紀要, 3(1), 11-19.
- 4) 西村辨作・原幸一 (1996) 障害児のきょうだい達 (1). 発達障害研究, 18(1), 56-67.
- 5) 大瀧玲子 (2011) 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観：きょうだいが担う役割の取得に注目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 235-243.
- 6) 高野恵代・岡本祐子 (2011) 障害者のきょうだいに関する心理学的研究の動向と展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 教育人間学関連領域, 60, 205-214.
- 7) 田倉さやか (2008) 障害者を同胞にもつきょうだいの心理過程：兄弟姉妹関係の肯定的認識に至る過程を探る. 小児の精神と神経, 48(4), 349-358.
- 8) 山本美智代・金壽子・長田久雄 (2000) 障害児・者の「きょうだい」の体験：成人「きょうだい」の面接調査から. 小児保健研究, 59 (4), 514-523.
- 9) 柳澤亜希子 (2007) 障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方. 特殊教育学研究, 45(1), 13-23.

謝辞

本研究をすすめるにあたり、質問紙調査の作成と実施に際して、イベントの実行委員長である金山敦氏に快く許可をいただきました。また、回答結果の分析に際しては、立山町立立山北部小学校教諭の中島育美さんの協力を得ました。ここに記して感謝申し上げます。

附記

本研究は、平成23年度富山大学大学院研究推進事業「障害とその代償性潜在能力の生命融合科学研究」により行われた。

(2012年8月31日受付)

(2012年10月10日受理)